荷運び型そでなし資料の分析

国立民族学博物館収蔵標本による(8)

山　崎　光　子

Analysis of *Sodenashi* for Working Clothes on the Carrying Loads: Specimens in the National Museum of Ethnology (8)

Mitsuko Yamazaki

はじめに

前報においては，防寒を主な目的とする家着型そでなし資料について報告したが[1]，ひきつづき本報では，主に荷運びなどの労働時に肩あてとして用いられたと思われる荷運び型そでなし資料についての分析結果を報告する。

研究方法

研究方法は前報と同様である。

結果と考察

資料２－１　〔品名〕つづり

〔標本番号〕Ｈ 18484（衣類Ｆ－４－２）

この資料は現地名称もつづりで，1934年広島県山縣郡中野村で礒見勇氏によって，同県内の他の多くの資料とともに採集されている。

横縞のそでなしである点は資料１－５に似ているが，これは明らかに労働用のカタアテでそれとは全く異なる。襠がなく，前後身頃がタコ糸状の太い糸で付図のようにつないである。しかしその紐も切れて結んだ跡があるが，右脇はそれも切れて半分ほどなくなっている。背の中央は図のように割りはぎになっている。そのため表裏の違いがなく，衿やへりとりの仕立ても同様で，表裏とも着られるようになっている。裂き織り布の端の始末から表布と裏布のちがいはわかるが，表側は裏よりやや褪色しており裏側で着られた様子はない。衿山も少しすり切れ，内側の縞布がのぞいている。

形状は裂き織り布２枚を背部分ではいで肩で折りかえして前・後身頃としたもので，かげ衿，脇紐つきである。周辺部は裾を除き表裏とも 1.2 ㎝ほどのへりとりがなされている。衿も 6.5 ㎝と幅広い。

裂き織りの経糸は右撚りの麻糸と思われる。緯の裂き布はあまり細くない木綿布で，白色系統の裂き布２本，紺系統の濃淡布２本づつを交互に入れてあり，両耳もその白と紺布を一本ずつ絡ませしっかりした耳ができている。糸密度は経〔６本／㎝〕，緯〔3.5本／㎝〕とかなり細かく，地機による織りと思われる。布の織り端には，撚りのない織り糸が１㎝以上織られている。

裂き布は各種の残り布を寄せ集めて織ったものであろうか，色は明るい灰〔Ｎ８（light gray）〕，紺の濃淡は藍や合成染料の黒色で，にぶ緑味青〔2.5Ｂ５／６（dull greenish blue）〕，にぶ青〔10Ｂ３／６（dull blue)〕，青味黒〔10Ｂ2／2（bluish black)〕，灰黒〔Ｎ２（grayish black）〕などであって，淡色は無地，濃色は縞が多く絣はみなれないようである。衿とへりとり布は茶灰色〔2.5ＹＲ5／2（brownish gray）〕で糸密度は経〔20／㎝〕，緯〔16／㎝〕で薄手の手織木綿である。

布の厚さは身頃2.73㎜，衿3.7㎜，へりとりは5.98㎜と厚い。衿肩明きの布は切らずに折りこんで厚くなっている。衿肩明きの始末はどのようになっているか，縫い込みの中でみえないが，多少その部分の織りがゆるんでいる。

縫い糸は，身頃の背のはぎ糸は太く白い左撚りの麻糸２本どり，身頃の裾は布の経糸でまつってある。へりとりと衿つけは細い右撚りの黒糸１本で，表に糸を出さないよう丁寧に〔10針目／10㎝〕でまつり縫いがしてある。

裁ち方は付図にみられる通りである。布幅を19.5㎝に，長さは身頃丈の２倍にして縫い代分を入れたもの２枚を織り，はぎ合わせてあり，用布は約３ｍほどである。衿布にははぎはなく，へりとり布にも１つもはぎ目はない。今はよれよれになっているが，出来上がった時は斬新なデザインのツヅレだったであろう。

資料２－２　〔品名〕カタアテ

〔標本番号〕27219（衣類Ｆ－２－５）

本資料は資料１－１と同様に，1960年，古河静江氏によって採集されたもので，採集地は新潟県佐渡郡相川町大字岩谷口である。このカタアテは今でも佐渡へ行くと，それぞれの家に残されているのをみかける。

佐渡のカタアテは，背中に軽いものを負うとき肩に着て荷縄を使って背負い，重い荷を負う時はカタアテの上にセナコウジをつけてから負うと云われている。しかし年配者は，夏はこの衣類一枚に腰まきで過ごして涼をとったという話も佐渡の赤泊で聞いた。

この資料は裂き織り衣を更に縫いなおしたものであるが，前身頃を縦半分に割った１幅仕立てである。地元の人によると，狭い幅で織って２枚をはいだカタアテの方が古い時代のものであるという。我が国の前開き型の系譜であるきものが２枚布使いであることからも，それはうなずけるかもしれない。この他に，並幅２枚を同様にはいだ大型のニズレ（次の資料２－３の裂き織り刺し子仕事着とほぼ同形）と呼ばれる，やはり荷を負う時のそでなしがある。万葉集などにもみられる我が国古来からの布肩衣などを連想させられる。

かげ衿型で，襠部分に短いひものついた衣服であるが，付図からもわかるように今までの資料と比べてきわめて小さい。古くなった裂き織り衣の片身頃でつくられていることが，かつてのかげ衿の跡が褪色せずに残っていることからわかる。その衿肩明きの跡は接いであり，力布もついたままである。後身頃の裾部分は，以前も裾だったと思われる。前後から布をあて刺し子してあり，薄手であるが堅く織られており，１枚の布のようになっている。

へりとり布と衿は浅黄無地である。これまでの裂き織りとは異なり，裾にもへりとりがあるのは裂き織り布の端の始末の織りがしてないためであろう。衿山は，すり切れて中の布がのぞいている。カタアテに着物と同じ衿は不用と思うが，衿肩あきの始末と合わせての慣習なのであろう。資料３－４・５は衿もへりとり風に始末してある。

脇には，襠の代りに３㎝幅の布の紐が１本渡してあるが，使い古して何度も取り替えたらしく，濃紺の木綿の布が用いてある。

裂き織りの素材は，経糸が右よりの細い麻糸で，緯には佐渡の裂き織りの通例であるが裂き布の間に糸を入れている。経糸より更に細い右よりの麻糸を１本ずつ２回入れてから，裂いた藍色の綿布を１本あて入れているようである。細い糸が入る上，地機で堅く締めて織ってあり更に使い古しているので，フェルト状になって織り目がよく見えない。薄くなり破れたところから見ると，裂いた綿布の幅は0.4㎝と細く，更に左方向の撚りをかけた糸のように仕上げている。緯に麻糸を１回ではなく２回入れることで布を薄手に保っている。

糸密度は経〔８本／㎝〕，緯糸はよく見えるところで裂き糸〔９本／㎝〕，すなわちその他の麻糸が〔18本／㎝〕であった。

色は浅黄色〔7.5Ｂ8／4（pale greenish blue）〕から，縹色の〔7.5Ｂ3／4（dark greenish blue）〕，紺色〔10Ｂ２／２（bluish black）〕などがあり，いずれも美しい藍染めである。

へりとり布もよく色がされているが，へりとりは縹色，衿は浅黄色で，糸密度は経〔18本／㎝〕，緯〔14本／㎝〕ほどである。布の厚さは身頃1.95㎜，衿3.24㎜，へりとり3.72㎜で，重さは280ｇであった。

更生前の衣服の衿肩明き部分が前身頃にあるため，平生は縫い込まれて見えなかった裂き布の衿肩明き部分の始末の様子を見ることができる。佐渡の裂き織は一般的には衿肩明きに切り込む部分には裂き布を入れず糸を入れて織り，あとで切ってもほつれないよう配慮されているものが多いが，本資料にはそれがなく，その代りにその部分に表裏から布を当て縦刺ししてから切り込みを入れ，切り口をよくかがって布がほつれないようにしてある。

このカタアテの衿肩明きの後衿部分には，紺色の当て布が白布の中芯を入れてしっかりと刺し子して縫いつけてある。前衿部分も裏に折り込まず，そのまま衿をつけているため，衿の部分の開きがほとんどなく無理があり，それが衿のすり切れる原因になっている。

縫い糸は，右撚りの細い黒木綿糸１本どりである。一枚布仕立ての表前身頃に縫い目はないが，衿の裏側の始末は〔３針目／10㎝〕と粗いまつりぐけ，へりとり布の始末は，表に小針，裏に大針を出して〔８針目／10㎝〕で折り縫いをしている。

脇の紐は衿肩明きの当て布と同じ色の紺布で，同じように布芯を２枚入れ，横に刺して縫いつけてある。いずれも後で補強したもののようであるが，それさえもすり切れて中の白布がのぞいている。

裁ち方は附図の通りで簡略である。用布もきわめて少なく約110㎝位である。他の残り布からもカタアテなどをつくったのであろうか。

資料２－３　〔品名〕裂き織刺子仕事着

〔標本番号〕62066（衣類Ｇ－５－４）

本資料は購入されたもののため情報に乏しいが，前資料のカタアテを拡大したような形で，やや重い荷を負う時に用いたものと思われる。この形のものは佐渡ではニズレと呼ばれ，また新潟県の間瀬ではツヅレと呼ばれるなど名称は一定でないが，全国各地に散在している形の裂き織り労働着である。いずれも大体，衿肩明きの周辺の肩あて部分や，脇明きの止まりの部分に白い太糸の刺し縫いがあり，脇や背にも同じように太糸で白く刺して補強してあるのが特徴であろう。荷運びの道具の未発達の頃の比較的古い時代のもので，裂き布はいずれも藍染め布の濃淡で無作為に織りあげた縞柄が美しい。

形状は付図にみられる通りそでなし形の2幅仕立てで襠はないが，31㎝の織幅いっぱいに使ってあるため大ぶりで体を充分に被覆することができる。衿はかげ衿で下前には別布が接いである。この衿や脇明きや衿下のへりとり布には傷みはなく，あとからつけられたものと思われる。着用頻度は高かったようで，経糸や緯糸のかなり摩耗したところや，前後からあて布をしてはいだところなども若干あるが，全体にみると白い太い縦刺しの糸が藍の横筋布に映えて美しい。堅く織られた地厚な織り物に見えるが手触りはやわらかく，高機織りかもしれない。

素材は平織り組織の裂き織り布である。経糸は右撚りの白い中細糸で麻糸らしい。緯は藍染の木綿布の濃淡で色は浅黄から紺まで〔2.5PB5／8 (pale blue)〕，〔5PB3／6 (deep blue)〕，〔5B2／1 (dark bluish gray)〕，〔7.5B8／4 (pale greenish blue)〕などである。糸密度は経〔6.3本／㎝〕，緯〔裂き布5.5本／㎝〕である。裂き布のうち紺に細い白の破線の糸の入った縞布（経糸に白糸を撚りかけて後織ったもの）の糸密度は経〔17本／㎝〕緯〔15本／㎝〕であった。

刺し糸と縫い糸は径が2～3㎜もある太いタコ糸のような白い麻糸で，左撚りの糸である。背の刺し方は，縦〔8針目／10㎝〕，横〔22針目／10㎝〕で太々と表裏同じ針目で刺してある。脇明け止まりも面積は少ないがほぼ同様に刺してある。脇はつき合わせて付図のように〔13針目／10㎝〕で刺してあり，背は1㎝重ねて図のように表に横縫いの小針，裏に経縫いの大針〔6.5針目／10㎝〕を出してとじつけるように縫ってある。裾は1.5㎝ほどを折り返し，その上をハの字型に巻縫いしてある。裂き織りはこの仕事着の丈に合わせて織ったのではなく，裾端の織り方に配慮してないため厚くなっている。

布の厚さは身頃2.51㎜，衿6.37㎜，へりとり3.66㎜で，重さは1,050ｇであった。

衿とへりとり布は，丁寧にくけ縫いがしてある。右撚りの黒糸1本どりで，衿は〔5.5針目／10㎝〕，へりとりは〔7針目／10㎝〕ほどであった。

布幅は31㎝，裁ち方は付図の通りであり，用布は約380㎝であった。

資料2－4　〔品名〕労働着

〔標本番号〕18549（衣類F－4－2）

1936年8月，鹿児島県大島郡宇検村宇検から浜田国義氏が採集したもの。現地名はウンヂョである。製作者は瀬川タケマツ氏で，「不用になったボロ着物を集めて造る　織方に3日を要す。冬だけの労働着」と付記されている。

ざっくりと織られよく着こなされた裂き織り衣で，へりとり布は衿べりも含めて極めて自由な幅でとってあり，これまでのそでなしと異なり衿らしいものがない。下前には全く違うへりとり布などもつけてあるが織り布のデザインが見事である。経糸は黒糸であるが片側に白い糸を数條入れており，緯糸には白とグレイの大絣柄の裂き布と藍と白の絣の裂き布とを交互に入れ，太い縞状に織ってある。

身丈にあわせて布の長さを織ってあり，布端には経糸と同じ糸を緯にも入れ薄手に仕上げ，表側に折り返してある。冬の労働着と記入されてあるが，暑い地域の裂き織りであるから佐渡のカタアテのように，あるいは夏の労働時にも直接着ることもあったのではないだろうか。肌を痛めないように裾を逆に折り返したり，袖口のへりとりも裂き織り布の端から大きく浮かせてつけてあるため肌ざわりはやわらかくなる。裂き織り布は厚いがむしろ肌にまとわらず，衿肩明きも大きく涼しいと思われる。勿論一般的には冬期のそでなしとして，また荷物を担ぐなどの労働にもよく用いられたであろう。表に比べ裏の藍色が鮮やかであった。国立民族学博物館の展示品の中にも類似のものがあるが，この地方は紺無地は少ないのだろうか，ほとんど絣などを裂き布としているようにみえる。

色は，他と比較すると明るい南国を思わせる色であるが，色名では紺〔5PB3／8 (dark blue)〕の濃淡が基調で，灰色〔N5 neutral gray)〕か灰白〔N9 (grayish white)〕，中には暗い茶灰〔5YR3／2 (dark brownish gray)〕などで構成されている。

布の厚さは身頃2.10㎜，衿3.80㎜，へりとり4.77㎜であり，重さは755ｇであった。

仕立て方は極めて粗雑で合わせ縫いのみ，茶色の右撚りの中太木綿糸２本で粗く〔５～６針目／10㎝〕で縫われていて，織り布への配慮と比べて粗末である。

裁ち方は極めて単純で付図のごとく布幅は33㎝の織り上がりで，用布は約340㎝であった。

資料２－５　〔品名〕裂き織り袖無し衣

〔標本番号〕21417（衣類Ｆ－４－14）

この資料は，収集時の記録はないが文部省史料館から移管されたもので，２－４の前資料と類似した形状であるが，これまでのそでなしと比較して身丈が特に長い。防寒用に供したものであろうか。

裂き織り布の袖無し衣である。前資料と同様に前開き部分と脇明き部分がいずれも太いへりとり布（1.5㎝，裾は２㎝と広い）でつつまれており，やはり織り布端は大きく３㎜程浮かせてつけてある。

へりとりの素材は黒木綿の畳のへりとり布のようなものであったが，よく使い古されており，右衿部分と右脇明は切れてしまったのかあとから色のさめた紺布で補ってある。右脇明けも同様であるが，左脇明のへりとりはとれたままになっている。身頃も前側の胴の部分が帯を締めたためか特に傷みがひどく，前後から布をあてて繕っている。縫いあげた時は肩当てがあったらしいが，片側がとれ，布がほつれたため他の布があててある。前側の若干異る位置に紐がついている。太い組み紐状のもので，一方はほつれて芯だけが残っている。紐のつけ方も外側方向にむいてつけてあり，縛りにくいと思われる。

素材は，経糸は右撚りの紺糸１本，緯に絣や格子などのいろいろな木綿布を裂き布にしてあり，糸密度は経〔24本／10㎝〕，緯〔28本／10㎝〕ほどであった。２－４の資料と比較すると色はくすんでいて汚い。

厚さは身頃2.08㎜，へりとり3.20㎜，重さは710ｇであった。

縫い方は，１㎝位の縫い代の合わせ縫いであるが，ほつれてしまい太い白糸や黒糸でかがってある。へりとり布の始末も粗く〔５針目／10㎝〕で，これもとれた部分が多く，粗雑にとじつけてある。男性の手になるものであろうか。

裁ち方は簡略で付図の通りである。布幅は27㎝の織り上り，用布は約430㎝であった。

ま　と　め

1.　資料の情報

そでなしの中でも防寒着というよりは労働用につくられたと思われる地厚い荷運び型そでなし５点を対象とした。その呼称は不明のものもあったが，ツヅリ，カタアテ，ウンヂョなど地域により異なり多様であり，採集時期は昭和９年２点，11年１点，35年１点，他は不明であったが，いずれもそれより更に古い時代に用いられていたものと思われる。点数は少ないが地域は新潟から鹿児島までと広域的であり，しかも離島などによくみられるのは，裂き織りが豊富な古手木綿とともに海上の道を経て伝播されていったことを推察させる。本報告の資料はいずれも裂き織りであることとかかわるのであろう。

2.　資料の分析

a.　形　状

荷運び型そでなしの構成要素は身頃のみからなり，衿はかげ衿のつくものと衿なしでへりとり布のみのものとがある。身頃は二幅仕立てが多く，しかも裂き織りで厚手のため縫い込めたりせず布幅いっぱいに仕立てるから身幅は広くなり，前後身頃は脇で縫いとじるだけで着用可能となる。資料２－１は刺き織りであるが布幅がせまいため，飾りとじ紐をまち代りに配してあり，資料２－２は，一幅仕立てのため，布でつくった太い短かい紐で前後をつないでいる。

荷運びを用途とすることで分類したが，厚手の裂き織りか肌にべとつかないという効用から，年配者によって夏期の衣料として用いられてもいたようである。

b.　材　料

素材はいずれも前述の如く裂き織り布である。経糸には鹿児島のそでなし以外は麻糸を用いている。いずれも右撚りであった。緯の裂き布は大半は紺木綿布であるが，南日本の裂き布には東日本では得がたい絣布が豊富に使われており，地域差が感じられた。

糸密度は裂き布の太さともかかわるため一概には比較できないが，織り締め方には粗密があり，特に資料２－３はかたく織られていた。

労働用とはいえ，かなり意識的にさき織り布の意匠構成に心配りされており，当時の人々の仕事着にかけた心情がしのばれた。

縫い糸にも麻糸があり，また市販品でない左撚りの糸も多くやはり古い時期のものが多いようである。色は白，黒，茶と色々で，本数も１本であったり２本だったりしていた。

c.　縫い方，裁ち方

縫い方は裂き織りで厚手のため重ね合わせてか

かることが多いが，やや薄手の布は合わせ縫いがしてあった。針目はいずれも10㎝に6針前後と粗くなる。

裁ち方は単純である。一幅と二幅仕立てでは勿論その用布量は倍加するが，人体の腰丈を標準にしているためほぼ一律で3〜4 ｍの間となる。もっとも丈長のものはそのかぎりではない。

裂き織り布の幅は30㎝前後であったが，細幅の裂き織り布もよく見かけられる。本報でのそれは約20㎝幅であった。

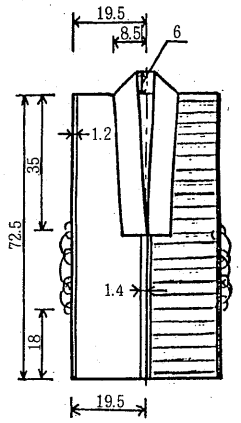
謝　　辞

この報告は国立民族学博物館の共同研究「非破壊分析をともなう日本在来の労働衣服の比較研究」の成果の一部である。

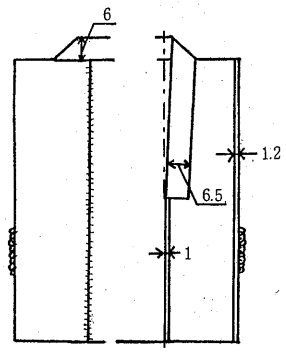
御指導頂きました共同研究代表の中村俊亀智教授（国立民族学博物館）をはじめとする各共同研究員の方々，ならびに資料の利用に御甚力下さいました国立民族学博物館，情報管理施設の方々に，心から御礼を申し上げます。

文　　献

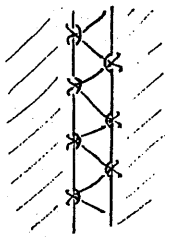
1）山崎光子：家着型そでなし資料の分析－国立民族学博物館収蔵標本による(7)，県立新潟女子短期大学研究紀要№23，37〜47，1986.



2－1－a



2－1－c－1



2－1－c－3

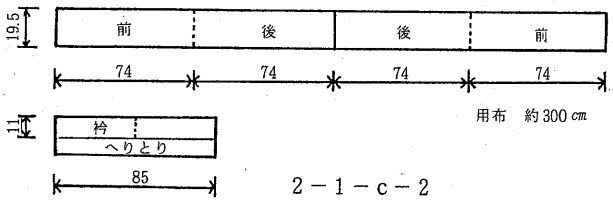
2－1－c－4

資料2－1　〔品名〕ツヅリ
〔標本番号〕18484

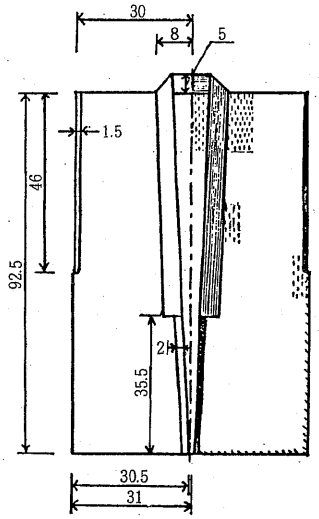
2－1－a　形状図
2－1－c－1　縫い方
2－1－c－2　裁ち方推定図
2－1－c－3　脇，とじ方
2－1－c－4　背中心の縫い方

資料2－3　〔品名〕裂き織刺子仕事着
〔標本番号〕62066

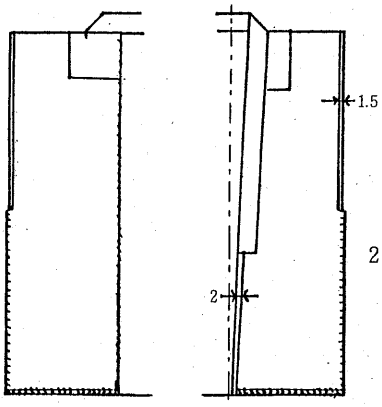
2－3－a　形状図
2－3－c－1　縫い方
2－3－c－2　脇の縫い方
2－3－c－3　背の縫い方
2－3－c－4　裾の縫い方
2－3－c－5　裁ち方推定図



2－1－c－2

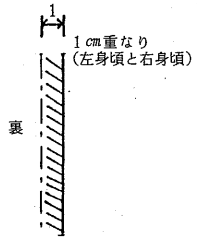


2－3－a

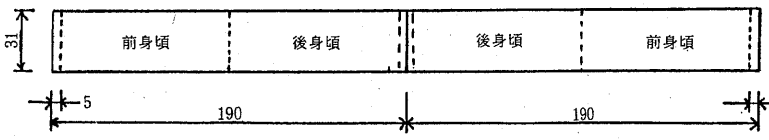


2－3－c－1

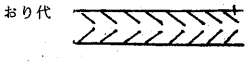
2－3－c－2



2－3－c－3

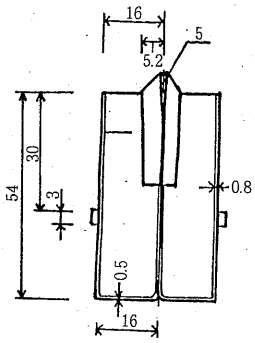


2－3－c－5

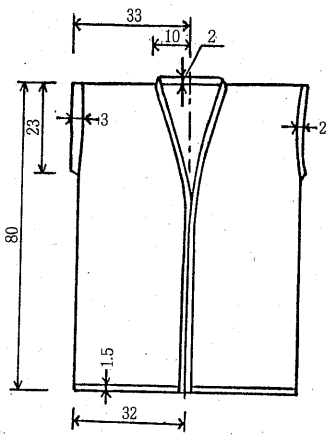


表布　総用布　約380㎝

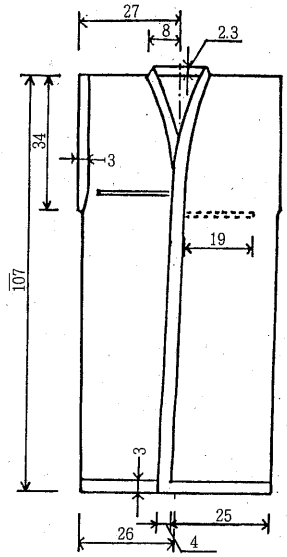
2－3－c－4



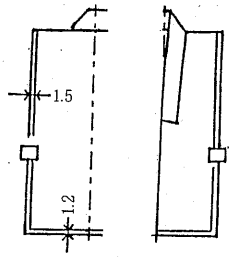
2－2－a



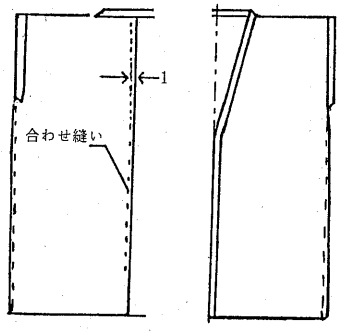
2－4－a



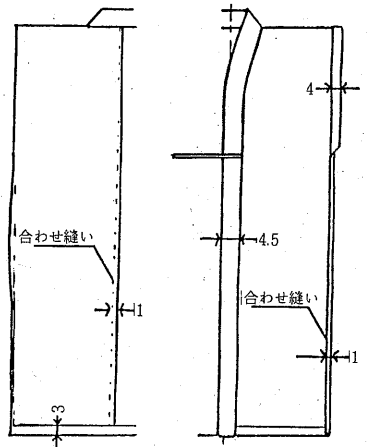
2－5－a



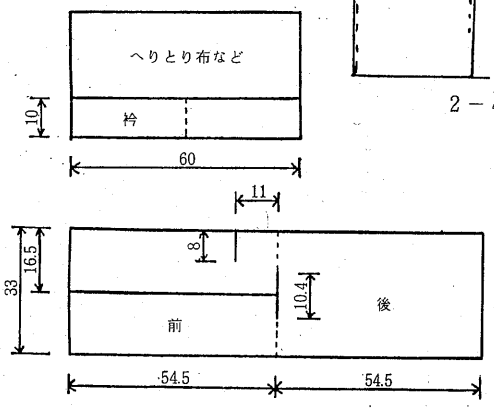
2－2－c－1



2－4－c－1

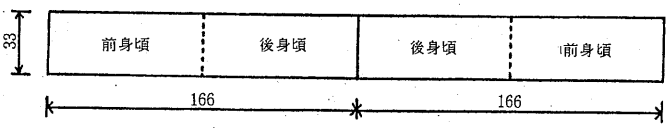


2－5－c－1



2－2－c－2　用布　約 110 cm

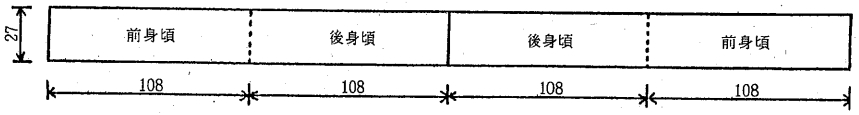
資料2－2
〔品名〕カタアテ
〔標本番号〕27219
2－2－a　形状図
2－2－c－1　縫い方
2－2－c－2　裁ち方推定図



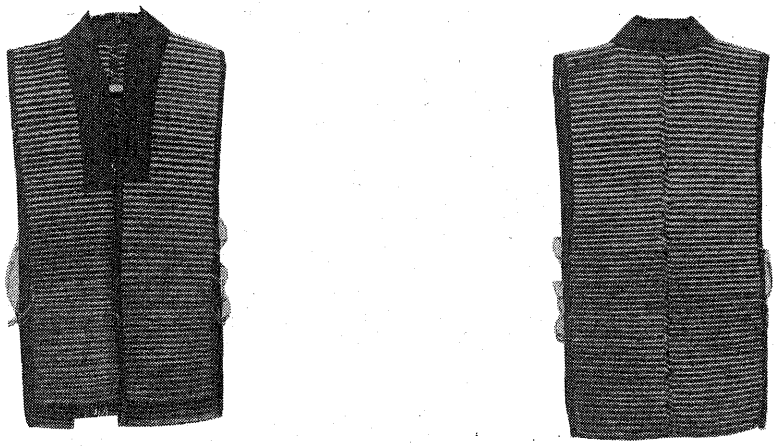
2－4－c－2　表布　総用布　約 340 cm

資料2－4　〔品名〕労働着
〔標本番号〕18549
2－4－a　形状図
2－4－c－1　縫い方
2－4－c－2　裁ち方推定図

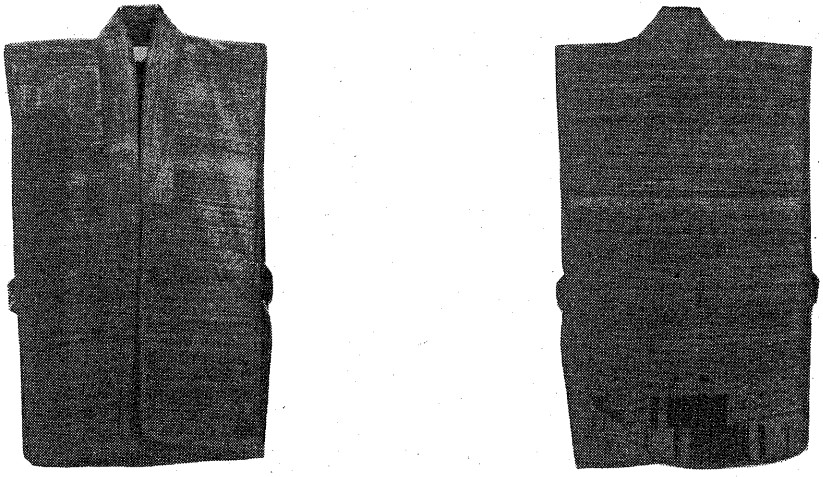
資料2－5　〔品名〕製織り袖無衣
〔標本番号〕21417
2－5－a　形状図
2－5－c－1　縫い方
2－5－c－2　裁ち方推定図



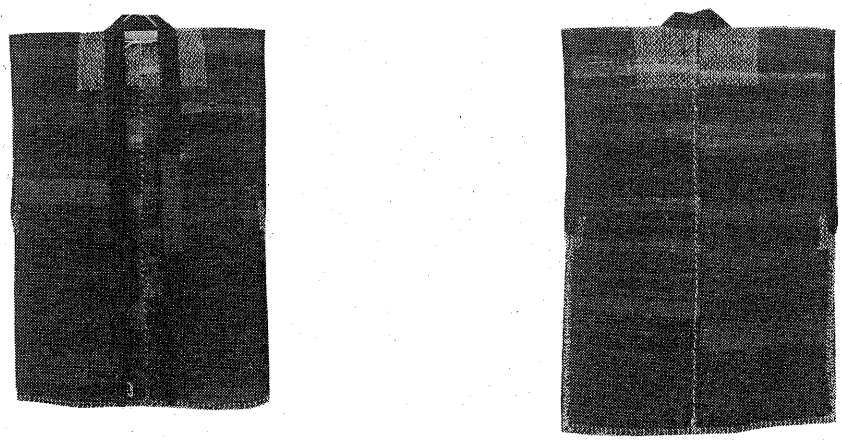
2－5－c－2　表布　総用布　約 430 cm



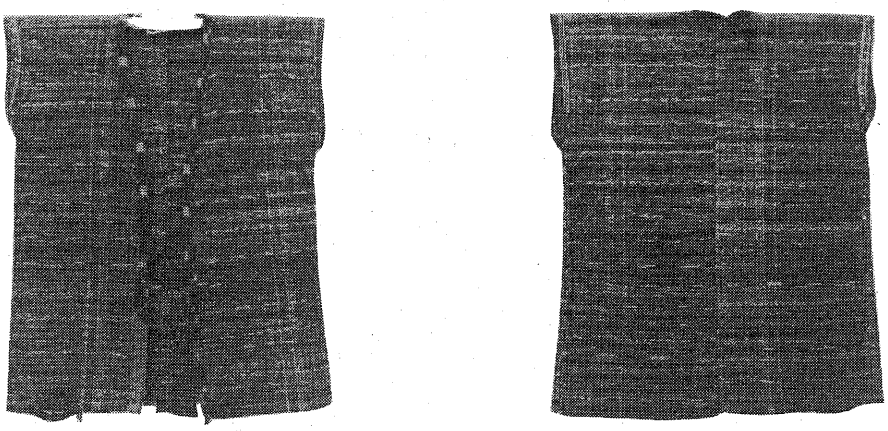
資料２－１　ツヅリ〔18484〕



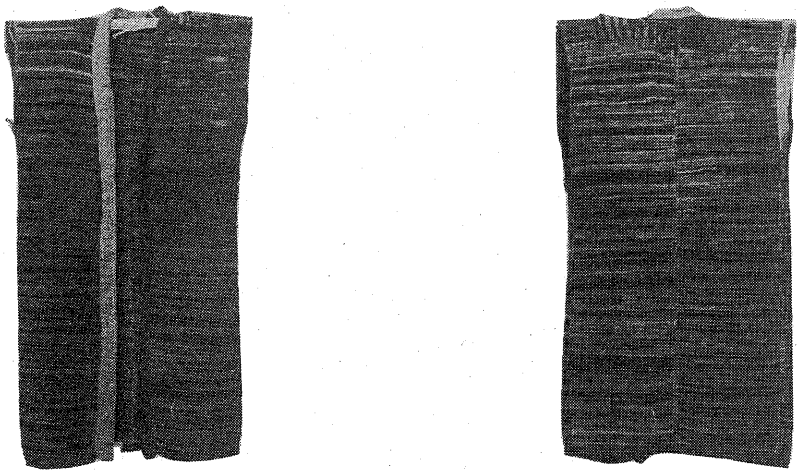
資料２－２　カタアテ〔27219〕



資料２－３　裂き織刺子仕事着〔62066〕



資料２－４　ウンヂョ〔18549〕



資料２－５　裂織袖無衣〔21417〕